



冷徹な黒豹公爵様は、運命の番で  
ある私にだけ甘すぎる

「フィア、どこへ行くつもりだ？」

そつと部屋を抜け出そうとした瞬間、大きな腕が私の腰を抱き寄せた。

「し、シオン……！？」

振り返れば、紫色の瞳がじつと私を見下ろしている。

黒豹国最大の財閥で冷酷だと恐れられているシオン・レイヴェル。  
けれど……………。

「俺を起こさないで、どこかに行こうとするなんて、悪い子だな」

低く甘い声で囁いてくる様子は、世間で噂されている冷酷な男とはまるで違う。

「ち、違うの……！ちよつとケーキを取りに行こうと思っただけで……」

「じゃあ、一緒に行こう」

「一人で行ける……！」

「だめだ」

即答で断られる。

シオンは私を軽々と抱き上げて、膝の上に座らせる。

「フィアは俺の番なんだから、勝手にどこかへ行くな」

そう言つて額にキスを落としてくるシオン。

発情することができない『出来損ないのねずみ姫』だった私が、まさか、黒豹国で最も有名な公爵に見初められ、溺愛されるようになるなんて……。

「運命の番

「フィア、本当に黒豹国の舞踏会に参加するのかい？ いいんだよ、無理しなくても」

心配そうな顔をするお父様。

隣でお母様も、同じような顔をしている。

「もうっ……大丈夫って言うてるじゃない！お父様もお母様もお兄様もみんな参加するのに、私だけ参加しないなんて……」

「他の誰かに何か言われるかとか、そんなこと気にしないでいいのよ？フィアが嫌な思いをする方が嫌なのよ」

ねずみ族が、弱い種族であることは、この世界に生きる誰もが知っている事実だ。

その中でも女性は発情期になると身体が敏感になり、狙われやすいので大事に育てられる。

が、私は生まれて20年、発情期がきたことがない、ねずみ族の王女なのだ。

発情期を迎えていないのに、過保護に育てられたのは、父、母、兄以外のねずみ獣人から酷い言動をされ続けたからである。

お茶会に呼ばれなかったり、陰口を叩かれたり、婚約話が持ち上がったって、「発情しない王女なんて」と断られたり……。

「大丈夫！私だって、外の世界を見てみたいわ……！ね？お父様、お母様、私も参加する！」  
「……………わかったよ、フィア。少しでも行きたくない気持ちになつたらいいなさい」

過保護な両親は私が外に出ることで傷つくんじゃないかって恐れてるみたいだけど、私は外の世界を見てみたい！

観光もしたいし、黒豹国には珍しい食べ物がいっぱいあるって聞いたことがあるし……！それに、お父様もお母様も私に発情期が来ないことを悲しいことのように捉えているけど、私はラッキーって思ったりしてる。

発情期はヶ月に一回のペースで来るし、「日くらい続くらしい。  
不自由すぎるじゃない！

★★★

「こっちがいいんじゃないでしょうか？」

私の侍女、エリが舞踏会に着ていくドレス選びを手伝ってくれている。

「ちょっと、派手すぎじゃないかしら？」

「このくらいキラキラさせないと、逆に地味すぎて目立ちますよー！」

「……そうかな？」

「そうです……！黒豹国の流行はちゃんと把握してきましたから、安心して、私に任せてください！」

ふんっ、と胸を張って自信满满そうなエリ。

こんなにキラキラさせたら目立つ気もするけど、エリがそういうんだから、信じるか……。バッグも靴も全部エリに選んでもらって、1週間後の舞踏会に備える。

★★★

「フィア、そろそろ行くわよー」

「はーい」

父、母、兄と同じ馬車に乗り込んで、使用人のみんなに見送られながら出発する。

「どれくらいで着くの？」

「明日の夜、着く予定だよ。途中で向こうが用意してくれた宿で休む予定だったよね？父さん」

答えてくれたのは、兄のエド。

「ああ、そうだよ。何度か泊まらせてもらったことがある宿でね、ご飯が美味しいんだ」

「……楽しみっ……！」

「ふふっ……フィアは相変わずにご飯に目がないのねえ」

家族との温かい会話に心があたたまる。

★★★

「はあ……やつと着いた……………」

楽しかったのは最初だけで、ガタガタ揺れる馬車のせいで、体がガチガチである。  
開催者側が用意してくれたホテルはとても綺麗で、ベッドもふかふかで最高……！

「舞踏会は明日の夜だから、昼間は観光できるかな」

ベッドでゴロゴロしながら明日のことを考える。

「ここでは、私はただのねずみ族だし、発情が来ない体を蔑まれたりしないし………過ぎしや  
すいゝ！」

黒豹国は、種族間の交流が盛んで、いろんな種族の獣人が住んでいるので、私が発情し  
ない獣人かどうかなんて誰もわからない。



「フィア、お母さん先に寝るわね？遅くまで起きてないで、早く寝るのよ」  
「はーい」

★★★

「わあー！キラキラ……………すごい……………街の建物も食べ物もねずみの国とは違って、豪華だったけど、舞踏会の会場は別格だ」

「こらこら、フィア。落着きなさい。お父様とエドは挨拶まわりをしてくるから、お母様と会場を回っているといい」

「はーい！」

「あなた、エド、よろしく頼みますよ」

会場は、いろんな種族の獣人でいっぱい。

みんなキラキラのドレスで、エリがドレス選びを手伝ってくれて良かったと心底思った。

「フィア、お母様と食事でもして、二人を待ってましょ」

「じゃあ、私が食事を取ってくるから、お母様はあそこに座って待ってて！」

「あら？ いいの？」

さつきから体が熱い気がするけど、どうしたんだろう……………。

初めての長旅で、疲れて、体調でも崩しちゃったのかな……………？

まあ、でも体が熱いだけで他に調子悪いところないから大丈夫かな。

そんなことを考えながら、おしゃれな料理をお皿に盛り付ける。

「今日はシオン様、いらっしゃるのかしら？」

「一年に一度の種族間交流だから、くるに決まってるわ……………！」

「私を婚約者を選んでくれないかしら」。はあ、運命の番だったらなあ」

会場を回っていると、どこでもこのシオンという名前を聞く。

黒豹国最大の財閥、レイヴェル家の当主様で、すごく冷たい人なんだっけか？  
外の情報を知らなさすぎる私でも、シオン・レイヴェルのことは知っている。

「運命の番かあ……………」

獣人たちが憧れる特別な相手。

……まあ、私には無縁の話だろうけど。

長身で、綺麗な顔立ち、地位も名誉も手に入れているとなれば、女性の憧れの的になるのは当然だろう。

ここにいる女性の多くが、シオン・レイヴェルの話をしている。

「まっ……そんなことより、私は、このご飯を食べることで頭がいっぱい……！えっ……このケーキ可愛すぎるっ……お母様も絶対好きだわっ……………」

ケーキへ夢中になっていると、入り口が急にざわざわし始める。

「何かあったのかしら……？」

入口を気にしつつ、お母様の元へ戻ろうと歩き始めた瞬間。

どくんつと心臓が大きく鼓動し、体温が急激に上昇する。

何っ……………熱いっ……………それに、向こうから甘い匂いがしてきて、クラクラする

……………。

「フィア……………!?どうしたの……………!?!」

みんなざわざわしている入り口に夢中で、私の異変に気付いてるのはお母様だけみたい……………良かった。

「なんだか……………体が急に熱くなって……………」

「……………顔が真っ赤よ……………?長旅で体調を崩してしまったのかしら……………どこか個室を用意してもらわないと……………」

そんなんじゃない気がする……………。

今まで感じたことのない感覚……………。

もしかして、発情……………!?!?

「フィア……！？どこに行くの……！！？フィア……！！」

発情してしまったのかもしれないと混乱し、どこか一人になれるところで身を隠したいと、駆け足で会場を出てしまった。

苦しいっ……………体が熱くてっ……………変っ……………全部変、っ……………！！

はあはあ、息を切らせながら、庭の奥深く、木々が生い茂る草の上で体を縮こませる。  
助けてっ……………苦しいっ……………誰かつ……………。

「見つけた。こんなところにいたのか、俺の運命の番」

「……………え……………？？」

低くて心地のいい声がした瞬間、甘くて、お腹の奥がじくじくと疼く匂いに包まれる。  
軽々と抱き上げられ、私は思わず顔を上げた。

艶のある黒髪、宝石みたいな紫色の瞳、綺麗な人だなと、思わず見つめてしまった。  
獲物を見つけたような鋭い視線の中に、どこか温かみを感じる。

「シオン様ー！急に走られては、困りますよー！」

はあはあ息を切らして、従者っぽい獣人が走ってくるのが見える。

シオン……………？まさかっ……………！！

シオンっ……………レイヴェルっ……………？

「追ってくるのが遅いぞ、ゼオ」

「シオン様が早すぎるんですよ。そんなことより、急に走り出して、こんなところにきて、何があったんですか？って……………え？なんですか、この状況」

「なんだって、さっき言っただろ、運命の番を見つけたって」

「ええー！！！！！」

急に大きな声を出されて、びっくりして、思わずシオン様のシャツを握って、体をピタリとくっつけてしまう。

「びつくりしたな、ごめんな、フィア？誰にも触れさせたりしないから、安心してくれ。その苦しい発情も今から、俺が楽にしてやるから……………フィアがびつくりしてしまっただろう。大きな声出すなよ、ゼオ」

「す、すみません……………」

シオン様、どうして私の名前を知ってるんだろう…………。

ちゃんと色々考えたいのに、体が熱くて、頭がぼーつとして何も考えられない。

「はあ……………はあ……………くる……………しい……………」

シオンに抱きしめられて、彼の匂いで満たされてから、孤独さや、息苦しさが嘘のように和らいだけど、お腹の奥のじくじくだけは治らない…………。

「苦しいな。もう少しだけ我慢してくれ」

シオン様の柔らかくて温かい唇が私の頬にふにと触れてくる。



大きな腕に包まれるのは思ってたより心地よくて、安心する。

連れて来られた部屋は、多分シオン様の寝室……。

部屋に入った瞬間、庭で抱きしめられた時の甘い香りがムンムンと鼻を刺激してきたからすぐわかった。

「はあ………はあ………こ、これはっ………やっぱり………発情ですかっ………?」

シオン様のシャツをぎゅっと握って、声を絞り出す。

発情って認めたくないけど、本能でシオン様を求めてしまっている。

どうしてなのかわからないけど、この人の腕の中から出たくない気持ちでいっぱいだった。

「……もしかして、フィア、発情するの、初めてか?」



「……………初めてですっ……………どうしたらいいんですかっ……………こわいっ……………」  
「そうか、初めての発情なのか。不安な気持ちになってしまふよな。フィア、俺の目を見て」  
「……………ひくっ……………」

目を合わせた瞬間、ブワツと身体中に電撃のようなものが走って、何かが強制的に引き出されるような感覚に包まれる。

気持ちいいっ……………何っこれっ……………頭の中真っ白……………。

「気持ちいいだろ？発情は怖いものではない。俺の番である以上、フィアには気持ちいい思いしかさせないよ」

「あっ……………ううっ……………♡」

……………ちゅづ……………ちゅくづ……………れづ……………ちゅくちゅくづ……………♡♡♡

唇を軽く触れさせるような優しいキスから、舌を絡めさせる深いキスに変わっていく。  
気持ちいいっ……………キスってこんな気持ちいいものなのづ……………♡!!!!

「んっ…………ふっ……………んんっ……………♡」

息をする隙も与えられず、舌を強制的に絡めさせられる。

苦しくて、思わずシオン様の厚い胸板を叩くと、ようやく唇を離してくれる。

「はぁ……………はぁ……………くるし……………です……………」

「……フィア、深いキスをするときは、鼻で息をしない。そうすれば舌絡めながらも息できるだろ」

「は……………な……………」

「そう。次は鼻で息してごらん、苦しくなくなるから」

……………ちゅっくちゅっ……………ちゅく、くちゅっ……………♡

シオン様のキスは、容赦無く、鼻で息をするように意識することはいっぱいいっぱい。苦しいけど……………お鼻で息するようになったらちよっと楽になった……………。

後頭部に手を当てられ、ゆっくりベッドに押し倒される。

ずっと舌絡まされて、気持ちよくてっ……………おまんこのぬるぬるすごいことになってる気がするっ……………♡

「上手にお鼻で息できるようになったじゃないか……偉いなあ……」

耳の中を指で撫でられながら、また、舌を絡める深いキスを繰り返される。

逃げてもすぐ捕まえられて、強制的に絡まされる。

敏感な歯裏を舐められて、体が勝手にびくびく震えてしまう。

「んっ……………ふうっ……………♡♡♡くるしっ……………こっち、苦しいですっ……………」

「んー？どこが苦しいんだ？ちゃんと教えてくれ」

口角を上げて、艶めかしい表情をするシオン様。

ちよつと意地悪な言い方な気がする……。

でも、この疼きを早く鎮めてほしい気持ちでいっぱいな私は、恥ずかしいという気持ち

を忘れて、おねだりしてしまう。

「お、おまんこっ……………がつ……………ずっと疼いてっ辛いのっ……………」

シオン様のシャツをぎゅっと握って、じっと見つめる。

「はぁ……………かわいいなぁ……………じゃあ、辛いおまんこ見せてくれ」

体を抱き起こされて、ドレスの紐を緩められる。

簡単に脱がされて、白いホワホワの下着姿にされる。

「フィアを傷つけないように抑制剤を飲んだが、こんな可愛い姿を見せられたら、理性がなくなりそうだな……………」

「あうっ……………♡」

するりとパンツが足から抜けていき、おまんこが露わになる。

シオン様の大きな手で太ももを左右に開かされ、じっくりおまんこを観察される。

「甘くて美味しそうな匂いでいっぱいだな。フィアはおまんこ舐められるの初めてだよな？」  
「……？初めてっ……ですっ……」

「よかった。これから気持ちいいこと全部俺が教えてあげるな？発情期のセックスも、そうじゃないセックスも。フィアは、もう番である俺にしかこんな姿見せちゃダメだからね」

太く綺麗な指で、大陰唇をくばあと開かされ、舌先でおまんこ全部をろろると舐められる。

「ふあああづ……♡」

舐められてるおまんこがエッチすぎて目が離せない。

知らないっ……こんな気持ちいいのっ……しらないづ……♡♡♡

初めて与えられる快樂に戸惑いながらも、もっともっと欲しがっている自分がいる。

「はぁ……甘いなぁ……フィアのおまんこ……おまんこ舐められるの気持ちいい……？」  
「気持ちいいっ……♡……おかしくなっちゃいますっ……♡」  
「おかしくなっちゃうかぁ……俺の前でだけなら好きなだけおかしくなってい。もっと乱れる可愛いフィアを見せて」

月明かりに照らされる、シオン様の紫色の瞳は狙った獲物は逃さないと云っているように、全部支配されてる気分になる。

前までの私なら怖がっていたはずなのに、今は違う……。  
この人になら、全部委ねてもいいと思うてしまう……。

愛液がとぷとぷ溢れでてる蜜穴と小陰唇を執拗に舐められ、頭の中が真っ白。

「そっ……こおおお……♡♡♡だめっですっ……そこっ……気持ち良すぎてらめっ……♡……！」

「ん……クリトリス舐められるの初めてなのに、ちょっと弄られただけでおつきくするなんて、エッチな体だなぁ……」

舌先で、ぶつくり腫れたクリトリスをぴんぴん弾いてくるシオン様。

くにゆりと潰されたり、左右に激しく揺すられる。

すごいっ……………知らないっ……………くりっこんな気持ちいいところだったなんて知らないっ……………♡♡♡——！

「やあああっ……………♡——！あっ……………ふんっ……………んんっ♡——！んんっ……………んっ……………♡だめっ……………ぴんぴんしゅるのっ……………だめですっ……………なんかきちやうっ……………なんかきちやう……………♡——！やめてええ……………♡——！」

じわじわとなにか弾けてしまいそうな感覚に襲われて、パニック状態に陥る。  
シオン様をじっと見つめて、助けを求めると、にこっと笑顔を向けてくれる。  
やめてくれるっ……………？

「フィア、なにかきちやう時はいくいくって俺に教えて」

「い、いくいく……………？」

「そう。いくいくってちゃんと俺に教えられたら助けてあげる」

「いくっ……いくっ……♡いく……♡——！」

快楽に飲み込まれてしまいそうなか、必死にシオン様を見つめていくくと連呼する。  
なんかきちゃうのっ……きもちいいのきちゃうのっ……怖いっ……助けてえ……♡  
！！

「いいこ、いっぱいいくいて言えて偉いなあ………」

そう言うと、膨らんだクリトリスを口の中に含んで、容赦無く左右に揺すってくるシオン様。

「んあああああ……むっ……りい……♡——！」

積もりに積もった快楽が一気に弾けて、頭の中が真っ白になる。  
何これっ……♡♡♡



「ん、いくいくできたみたいだな。フィアのここきゅうきゅう締まって俺に教えてくれる」

ぬぷぬぷと密穴に舌を出し入れされる。

これがい……………く？

えっちがこんなに気持ちいい行為だったなんて、知らなかった……………。

「はあ……………はあ……………♡♡♡」

「発情してるから、おまんこ柔らかくなってるだろうけど、フィアはセックスするの初めてだから、ちゃんと慣らそうね」

クリいきの余韻でぼーっとしてて、何も考えられない。  
治ったと思ったお腹の疼きはひどくなる一方だし……………。

「ひあっ……………♡！！！」

密穴に指が挿入されて、びっくりして現実に引き戻される。

「おまんこ小さくて、可愛い……………俺のを受け入れても痛くないように、いっぱい慣らしてあげるからね」

ぬぼっ……ぬぼっ……ぬぼっぬぼっ………♡

「ふっ……………ああっ……………♡もつと……………奥ううう……………♡」

シオンの指が出し入れされるたびに、おまんこの奥が疼いて仕方ない……。もつと……もつと、奥……ずんずんされたいいい……………♡!!!!!!

「もつと奥をどうしてほしいの、フィア。」

耳奥に響いてくる低音ボイスに体がゾクゾクと震える。

「奥っ…………奥っ…………ずんずんされたいい……………辛いのっ……………ずっと疼いてっ  
……………辛いのっ……………♡!!!!」

「奥疼いて辛いなあ…………でも、ずんずんするには、これを受け入れるしかないんだよ、フィア。まだ慣らされてない、小さなフィアのおまんこでできる？」

おまんこを弄っていた指をぬぼんと抜いて、自身のズボンに手をかけるシオン様。

パンツのゴムごと下に下ろすと、ぶるんつと赤黒く凶暴的な肉棒が現れて、ムンムンを雄の匂いを纏わせている。

ナニコレ……………男の人のおちんちんがこんなに大きいなんて……………知らない……………。

そんな大きな肉棒を見せられて、怖いだけのはずなのに、おまんこの奥は激しく疼いて、ほしいほしいと私の体に訴えかけてきている。

「……………おっ……………きい……………」

「だろう？フィアのかわいいおまんこが痛い痛いしないように、ちゃんと解してあげような。いい子にできたら、フィアが鳴いて喜ぶくらい奥突いてあげるから」

吸い込まれそうなシオン様の瞳から目が離せない。

「あんづ………♡——！——ふっ………ううう………そこっ………そこだめええづ………  
さっきみたいにきちやいますづ………♡——！」

「ここかぁ………ここがフィアの気持ちいいところな。いじめてあげるから我慢しないで、いっぱいいくいくしなさい。奥に欲しいんだろ？」

ぬぼづぬぼづ………とんづとんづ………ぬちゅづ………♡

容赦無く敏感なところをトントンと撫でられて、くりいきしてそう時間が経ってないのに、中で絶頂する。

「いくづ………いくづ………きちやうううづ………♡——！」  
「中いきもすぐできて、いい子じゃないか。きゅうきゅう俺の指を締め付けてくるまんこもかわいい」

中いきも気持ちいいっ……………気持ちいいけどっ……………やっぱり……………奥ずんずんされないっ……………だめえっ……………♡！！

「奥っ……………奥欲しいのおっ……………♡！！」

「まだ、一回しか中でいくいくしてないだろう？だめだ」

中いきの余韻に浸る時間も与えられず、ぬぼぬぼと激しく指を出し入れされる。

愛液がかき乱される音が部屋中に響いて、えっちだ……………。

またいくいくしちゃうっ……………♡！！！！

「いくいくするっ……………またっ……………いくいくするのっ……………♡」

「ああ、好きなだけいくいくしなさい」

びくっ……………びくっ……………♡

おかしいっ……………いっぱいいくいくしてるのにつ……………気持ちいいのにつ……………お腹のじくじ

くひどくなってるっ……………♡

「無理いいい……………もっ……………我慢できないっ……………欲しいいい……………♡」

ひくひくと目に涙をいっぱい溜めながらシオン様を見つめると、目尻に唇を触れさせてくる。

「かわいくおねだりできたら、フィアのお願い聞いてあげようかな」  
「……………? おねだり……………」

「そう。シオンのおちんちんで奥いっぱいいてくださいって……………」

ふーっと耳の中に息を吹きかけられて、囁かれる。

シトラスの爽やかな香りに包まれる。

肉棒をぶるんと外に出したシオン様を前に、おまんこを自分でくぱあと開き、うるうるした瞳で見つめる。

「し、シオンの……で……奥っ……いっぱい突いてっ……♡……！！！」

「はあ……俺の番はえっちで可愛すぎるな……番のおねだりはなんでも聞いてしまうと聞くが、あれは本当だな……フィアにねだられるとなんでも聞いてあげたくなってしまう」

艶のある前髪をかき上げた瞬間、空気が一気に変わる。

「かわいい番のおねだりだ、聞いてやろう……おまんこばちゅばちゅして、奥にいっぱい出そうな？……精子……♡」

手についた愛液を肉棒に塗りつけて、おまんこに擦り付けてくる。

「んっ……ふっ……ふぁっ……♡」

くるっ……くるっ……こんな大きいので奥突かれたらっ……♡♡♡

「ゆっくり挿れるが、苦しかったり、痛かったりしたらすぐ教えてくれ。フィアを傷つける

わけにはいかないからな」

自分の欲求を優先せず、私の体のことを考えてくれるシオンに、胸がキュンと高鳴る。

「んっ……………」

頬をほんの少しピンク色に染めながらこくこくと頷く。

ぬぽっ…………ぬぽっ、と亀頭部分の出し入れを繰り返されながら、どんどん奥へ挿入される。

「ふっ…………んあっ…………♡!!!んっ…………んあっ…………♡!!!」

「はあ……フィアのおまんこ、上手に俺のを咥えられたな。どう？痛くないか？」

「痛くっ…………ないいい…………おくっ…………おくう…………♡」

「はいはい……………」

太ももをグッと押さえられて、おまんこを見ると、血管バキバキの肉棒がぬぽっと抜け



ていく。

バチュっ……♡……！！！！

「んあああああ……♡……！！！！きたあ……おく……気持ちいい……！！」

最初から容赦無く腰を奥まで押し付けてくるシオン。

「奥突かれるの、気持ちいいなあ……♡」

顔を顰めながら、奥をばちゅばちゅついてくるシオンの表情に、興奮してしまう。

かっこいいっ……シオンっ……かっこいいいっ……♡……！！

奥気持ちよくて……ずっと頭真っ白っ……♡……！！

「もっ……いっっちゃううう……♡……！！無理いい……♡……！！」

容赦無く奥を突かれて、我慢できず、絶頂する。

今まで感じたことないくらい深くて長い快楽で、意識が飛んでしまいそうだった。

「あー、締まる……………無理だ、こんなかわいい姿見たら我慢できないな……………」

バチュっ……………パンっ……………パンっ……………バチュ、バチュっ……………♡！！！！

「いった……………のにいい……………しょんなにつ……………奥っ……………突かれたらっ……………またいつ  
ちやうううう……………♡！！！！」

「いいよ、好きなだけイっていいって言っただろうっ……………？」

「うんっ……………うんっ……………いくっ……………いきゅうううう……………♡！！！！」

奥でいくのすごいのっ……………♡！！！！

「いくたびに、俺のをきゅうきゅう締めてきて、俺も我慢できそうにないな……………奥に  
いっぱい出すな？フィア……………」

ちゅづ……くちゅ、ちゅづ……くちゅづ……♡♡♡

舌を絡める深いキスをされながら、奥をばちゅばちゅ突かれる。  
早くっ……欲しいっ……奥にっ……欲しいっ……♡

「んふづ……ふうづ……♡♡……んんづ……♡い……ふっ……」

おまんこをきゅうきゅう締めて、精子をねだる。

「ん……ふう……♡そんな締めなくても、今出してやるっ……」

ドピュっ……びゅづ……♡

子宮が一気に熱くなって、幸福感に包まれる。

「はあ……………♡……………あつた……………かいづ……………♡……………」

さつきからずっと物足りないと思っていた何かが埋められた気がする。

シオンの精液で満たされて、ぎゅっと抱きしめられて、緊張の糸がプツンと切れる。

「初めての発情セックス頑張ったな、フィア。あとは全部俺に任せておやすみ」

乱れた前髪を掻き分けて、おでこにちゅつと優しいキスをしてくれるシオン。

その温もりに安心して、夢の中へ落ちていく。

### ★★★シオン視点

発情に当てられていない侍女に湯の準備をさせ、フィアが起きないようにゆっくり体を綺麗にしてやる。

どこもかしこも小さくて、壊さないように丁寧に丁寧に触れる。

ベッドに寝かせてやると、クンクン匂いを嗅いで、俺のそばにすり寄ってくる。

「はあ……可愛いなあ……まさか俺の運命の番がこんな小さくて可愛いねずみ姫だったとはな」